

修士論文要旨  
2011年1月

## 児童の不安や抑うつと母子の信頼感や認知の相違との関係

指導教員 山口一教授

心理学研究科  
臨床心理学専攻  
209 J 4011  
生澤宏直

## 目次

I.問題と目的	1
II.方法	1
III.結果と考察	1
IV.参考・引用文献	

## I. 問題と目的

近年の研究において、うつ病にかかる子どもが多く存在することが明らかになってきた（傳田、2002）。児童期の子どもにおいて、ストレスが不安症状や抑うつ症状に重大な影響を及ぼすことが知られており、それらを経験する場面としては、学校、家庭、地域社会などが指摘されている（竹中、1997）。高いストレス状況に置かれた子どもたちが、学校生活を過ごしていくことができるためには、親や親友などの“重要な他者 (Significant other ; Sullivan,1953)”との間に基本的信頼感 (Erikson,1963) を形成していることが必要であると考えられている。このように親は重要な他者として基本的信頼感を形成するための大切な存在であるが、親と子どもで認知の相違があると親子間の信頼感がそこなわれ、コミュニケーションが上手くいかず情緒面での問題が生じ、抑うつや不安の状態になると考えられる。

本研究では、この親子間の認知の相違が子どもに多大な影響を及ぼすことが考えられるため、性格と家族関係に注目し、自己の性格の認知と親が認知する子どもの性格の認知の相違や家族関係における親子間での認知の相違が児童の抑うつや不安、親子の信頼感と関連しているかを検討する。また、親子間のコミュニケーションの量や内容、あるいは親子のコミュニケーションについての認識の相違も、抑うつや不安あるいは信頼感と関連していることが考えられるため、検討することとした。

## II. 方法

調査対象は、栃木県内の2つの小学校の5年生98名（男子：54名、女子：44名）、6年生82名（男子：51名、女子：31名）とその母親180名の計180組であった。調査票は、会話時間や関わり時間、その内容などの情報を聞くフェイスシート、児童の抑うつの測定として Depression Self-Rating Scale for Children 日本版（村田ら1996）、児童の特性不安の測定として State-Trait Anxiety Inventory for Children 日本版（曾我1983）、認知の相違の測定として性格イメージ尺度と家族関係イメージ尺度（今回作成）、信頼感の測定として親子間の信頼感に関する尺度（酒井ら2002）を使用し、各尺度間の関連を検討した。

## III. 結果と考察

今回の調査で DSRSC 得点のカットオフポイントを越えた児童は19名（男子10名、女子9名）で、全体の10.6%（男子9.52%、女子12.0%）で先行研究とほぼ同様であった。いっぽう、先行研究で認められた性差は認められなかった。

母子間の認知の相違を測定するために、性格イメージ尺度と家族関係イメージ尺度を最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、性格イメージ尺度から「外向性」、「慎重性」の2因子が抽出され、家族関係イメージ尺度から「開放性」、「柔軟性」の2因子が抽出された。抽出された4因子と信頼感について、児童と母親のそれぞれの因子得点の平均点の高低で、(子, 親) = (H,H) (L,H) (L, L) (H, L) の4群に分類し、抑うつと不安との関連を検証した。その結果、「外向性」因子において、(L,H) の群が (H,H) の群よりも有意に抑うつが高かった。また、信頼感においては、(L,H) 群が、(H,H) 群、(H, L) 群に比べて有意に抑うつ、不安共に高かった。これらの結果から、児童の自己評価が低いにも関わらず母親の評価が高いという認識の相違が認められた場合に抑うつや不

安が高まる可能性が認められた。その他の結果からは母子間の認知の相違よりも児童自身が自分自身や家族関係を肯定的に捉えているかが重要な要因であることが示された。

また、児童の信頼感が高いことが抑うつや不安を低減させており、信頼感を高める要因として会話時間、平日・休日の関わり時間が考えられ、特に関わり時間が児童の信頼感を高めることに影響していた。母親の信頼感の高さと関連していたのは会話時間であったことから、児童は非言語的なコミュニケーションを重要と感じ、母親は言語的なコミュニケーションを重要と感じている母子間の認知の相違が示された。

以上のように、母子間の様々な認知の相違が抑うつや不安と信頼感に影響していることがわかったが、認知の相違に加えて児童が物事などを肯定的に捉える事が抑うつや不安の低下および信頼感の育成に重要であることが示された。

児童期後期の児童の発達的な変化は著しく、5年生と6年生では児童の性格や家族関係イメージに大きな変化がある一方で、母親のイメージには大きな変化はない。また、会話時間・関わり時間、その内容においても児童とその母親の認知には大きな差があり、母親が児童の急激な変化に追いついていないこと示唆された。中学生の頃から抑うつが増加するが、本研究では中学校以降の追跡ができていない。思春期の身体的、心理的な急激な変化にともなう母子間の認知の相違が、この時期の抑うつや不安にどのように影響していくのか研究することを今後の課題としたい。

#### IV.参考・引用文献

- 足利学・澤村律子・竹中義人・田中英高・田中敏隆・寺嶋繁典・千原精四郎 1998 アンケート調査による不適応関連徴候に関する親子の認知のずれの検討 心身医,38,3
- 天羽幸子・木島伸彦・酒井厚・菅原健介・菅原ますみ・詫摩武俊・眞榮城和美 2003 子どもによる親への対人的信頼感 発達心理学研究 第14号、第2号、pp.191-200
- 新井邦二郎・佐藤寛 2003 子ども用抑うつ自己評価尺度(DSRS)の因子モデルの検討 筑波大学心理学研究 第25号、123-128、
- 新井邦二郎・佐藤寛 2003 児童の不安症状と抑うつ症状に及ぼす学校ストレスの効果 発達心理学研究 第15巻
- 新井邦二郎・佐藤寛 2004 児童における素因ストレスモデルの検討 筑波大学心理学研究 第27号、65-71
- 安保英勇・石津憲一郎 2007 中学生の抑うつ傾向と過剰適応 東北大学大学院教育学研究科研究年報 第55集、第2号、271-288
- Bowlby,J 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一(共訳) 1976 母子関係の理論 I 愛着行動 岩崎学術出版社 (Bowlby,J,1969 Attachment and loss:Vol.1 Attachment.New York:Basic Book)
- 傳田健三・加古勇輝・佐々木幸哉・伊藤耕一・北川伸樹・小山司 2004 小・中学生の抑うつ状態に関する調査—Birlson自己記入式抑うつ評価尺度(DSRS-C)を用いて— 児童青年精神医学とその近接領域, 45, 424-436
- Erikson,E,H. 1963 Childfood and society 2nd ed. New York:Norton. (仁科弥生(訳) 1977 幼児期と社会1 みすず書房)
- Harrington,R,Bredenkamp,D.,Groothues,C.,Rutter,M.,Fudge,H.,&Pickles,A. 1994 Adult outcomes of childhood and adolescent depression:III.Links with suicidal behaviors. Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines,35,1309-1319
- 内田利広・藤森崇志 2007 家族関係と児童の抑うつ・不安感に関する研究 京都教育大学紀要 No.110 93-110
- 小松孝至 1999 児童の社会的特性に関する自己認知と母親による認知の差異 教育心理学研究 第47号、49-58
- 草田寿子・山田裕紀子 1998 家族関係単純図式投影法の基礎的研究IV 人間科学研究文 教大学人間科学部 第20号
- 村上宣寛・村上千恵子 1997 主要5因子性格検査の尺度構成 性格心理学研究 6,1,29-39
- 斎藤富由起・守谷賢二・吉森丹衣子 2009 青年期における見捨てられ不安と愛着の関連性 千里金蘭大学紀要 35-41
- 酒井厚・菅原ますみ・田中麻未・眞榮城和美 2001 家族への信頼感と親の養育態度に関する行動遺伝学的検討 発達心理学研究,14,2
- 酒井厚 2005 対人的信頼感の発達に関する発達 川島書店
- 佐々木久長・佐藤宏治 2008 児童の感情と家族関係の認知の関連 秋田大学医学部保健学科紀要、16(2),24-30